



2013年5月29日放送

漢方を理解するための10処方

日本漢方振興会漢方三考塾 講師 高山 宏世

(2) 葛根湯 (かつこんとう)

此の処方のキーワードは「外感病の初期」です。

弁証キーワードは①カゼ症状、②項背強ばり時に下利腹痛、③汗無く脈浮緊です。

(どんな処方か?)

葛根湯は「葛根湯医者」とか、あるいは「かぜを引いたら葛根湯」などと云う諺があるぐらい、わが国では漢方薬といえば真っ先に連想される位よく知られた漢方処方です。

病気には、自然界の環境とか病原体のような外邪が人間を侵襲して病気を起させる外感病と、体内の異常から生じる内傷雑病とがあります。

葛根湯は外邪の一つ、風寒の邪が原因で起る外感病の初期段階である「太陽傷寒」と呼ばれる時期に用いられる代表的な漢方処方の一つです。太陽傷寒とは現代的に云うと普通のカゼやインフルエンザの初期に当たり、発熱と同時に寒気を伴う「発熱悪寒」があるが身体は熱くても汗は出ない、全身の違和感があって気分が悪い、体の節々が痛む、頭が痛い、鼻水や咳が出るなどです。

病人の脈を取ってみると何時もと違い一寸触れるだけで脈打っているのがわかる「浮緊」という脈状で、太陽傷寒では必ず現われる脈の特徴です。漢方では病気の証によって、特有の脈が現われます。それぞれの脈は漢方的診断には大切な手懸かりとなるので、この浮緊の脈は先ず最初に覚えて頂きたい脈の一つです。

漢方の診察では必ず脈の他に病人の舌と腹を診ます。表証では舌に変化は見られません。**葛根湯**は表証の薬ですから舌は健康人と変わりはありません。

腹診をすると、発汗も特別な所見も無く、腹部の緊張は良好です。ただ時に臍のすぐ上辺りに過敏な圧痛点が有るのを経験することがあります。

(葛根湯の原典)

一口にカゼといっても、その症状は様々です。カゼをひくと咳が強い人、筋肉が痛んだり引きつる人もあり、あるいはカゼの症状と共に吐き気がしたり、下利腹痛を伴う人もいます。漢方ではその度に用いられる薬が違ってきます。

葛根湯の処方やその使い方を始めて記載した原典は『傷寒論』という書物で2世紀ごろの後漢の時代、長沙という地方の太守であった張仲景という人が著したと云われています。その中で**葛根湯**については、

第31条「太陽病、項背強バコト凡凡（しゅしゅ）、汗無ク悪風スルハ**葛根湯**之ヲ主ル」

第32条「太陽ト陽明の合病ハ必ズ自（みずか）ラ下利ス、**葛根湯**之ヲ主ル」と2か条に亘って書かれています。またこの『傷寒論』の冒頭第1条には「太陽ノ病タル、脉浮、頭項強痛シテ悪寒ス」及び第3条「太陽病或ハ已ニ発熱シ、或ハ未ダ発熱セザルモ、必ズ悪寒シ、体痛ミ、嘔逆シ、脉陰陽トモニ緊ノ者ハ名ズケテ傷寒ト爲ス」と、太陽病と傷寒の定義を明確に記しています。

原典の条文から見ますと、**葛根湯**はカゼ症候群やインフルエンザの初期に現われる太陽傷寒の症状に加えて、特に項背つまり背筋の突っ張りが強い人、あるいは下利を伴う場合に最も適合した処方であることが解ります。

漢方では傷寒という病気は風寒の邪が先ず頭頂部に取り付いて体の表面全体に拡がると共に、病邪は皮膚と繋がっている肺即ち呼吸器系統にも侵入するので鼻水や咳といった症状が出現します。一方病邪は後頭部から両側の背筋を通り膀胱に繋がる足太陽膀胱経脈という経脈を伝って体の中に侵入するので、太陽傷寒では「項背強痛」という背中の筋肉の強ばりや痛みが現われるのです。

次に32条に「太陽ト陽明ノ合病ハ自カラ下利ス」とありました。外から侵入する病邪の勢いが非常に強いと、邪は太陽経脈だけでなくその隣の足陽明経脈からも同時に侵入して来ます。これを太陽と陽明の合病と言います。陽明経脈は顔と体の前面を通り胃に繋がっています。従って太陽陽明の合病では太陽経脈が単独に風寒の邪を感受した時よりさらに広範で重篤な、たとえば発熱が非常に顕著、陽明経に沿った前頭部の眉間の辺りが痛む、顔面や眼の充血や熱感が強いなどの陽明経の症状が加わることが少なくありません。同時に陽明経に連なる胃も邪の侵襲を受けるので、その時には嘔吐とか下利腹痛といった陽明胃の症状も加わって出現します。

もう一つの原典は『傷寒論』と並ぶ『金匱要略』の瘧濕喝病篇 第2に「太陽病、汗無く小便反テ少ナク、氣上リテ胸ヲ衝キ、口噤シテ語ルヲ得ザルハ剛瘧ヲ爲サント欲ス。葛根湯之ヲ主ル」とあります。

この条文は筋肉の津液（正常な水分）が不足して筋肉が滋潤されていない人が風寒の邪を感受すると悪寒発熱と共に全身の筋肉が栄養滋潤されていない爲に強直や瘧攣を生じる、現代の破傷風の初期に似た剛瘧という病の証候と治方を述べたもので、太陽傷寒の変証の一つについて論じたと考えられます。

（葛根湯の処方構成）

次に葛根湯がどのような生薬の組み合わせから出来ているかについてお話しします。

葛根湯は、葛根、麻黄、桂枝、芍薬、甘草、生姜、大棗という7種類の生薬からできています。君薬は葛根でマメ科のクズの根です。体表部の邪熱を發表解散させると共に、滋潤性があるので筋肉を潤しながら栄養し特に項背部の凝りや痛みを緩解するのに顕著な効果があります。また陽明経の胃にも入るので嘔吐や下利腹痛などの胃腸の症状を治します。臣薬は麻黄、佐薬は桂枝と芍薬で、残りの甘草、生姜、大棗が使薬です。麻黄と桂枝の組み合わせは太陽病傷寒には必ず用いられ、体表に在る風寒の邪を強力な発汗作用によって発散させます。芍薬は皮下の毛細血管や汗腺を保護し、麻黄と桂枝の発汗作用にブレーキをかけ発汗作用を適正に保ちます。甘草は諸薬を調和し味を調え、生姜や大棗と共に活力を生む源である脾胃即ち胃腸を保護し病人の抵抗力や自然治癒力の維持増強を図ります。このように葛根以下7種の生薬が君臣佐使の法則に従って配合され、お互いが協力し合っ

（葛根湯の臨床応用）

臨床の場での葛根湯の応用を考えて見ますと、先ずはカゼ症候群やインフルエンザなどによく見られるように発熱悪寒が有り、汗は無く、脈ははっきりした浮緊で、項背部の凝りや時に筋肉痛が顕著な人、あるいはカゼ症状に下利嘔吐や腹痛などの胃腸症状も伴う場合です。さらに破傷風の初期などに見られる牙関緊急や後弓反張のような筋肉の硬直瘧攣の兆候が疑われる病人などです。また条文に直接記載されている症状の他、カゼやインフルエンザに限らず、花粉症とか鼻アレルギー、或は結膜炎、中耳炎、扁桃炎、乳腺炎、リンパ節の炎症性腫脹などの炎症性の疾患以外にも、頑固な肩こり、筋肉痛、肩関節痛、上腕神経痛、頸腕症候群、場合によっては蕁麻疹まで、傷寒意外にも様々な特に上半身の症状に試みて良い処方です。

（類証との鑑別）

太陽病は風邪が体表を浅く侵襲しただけで、症状の軽い鼻カゼ程度の太陽中風と、風寒の邪が体表から深く侵襲する重症の太陽傷寒とに分けられます。

若し、太陽中風であれば、本方から麻黄と葛根を除いた**桂枝湯**の証となります。

若し病気の初めから発熱悪寒が顕著、頭痛や咳が強く、体の節々や関節が痛むようであれば、典型的な太陽傷寒証と考えられるので、本方から葛根と薬力を緩和する生姜・大棗を去り代わりに鎮咳平喘の杏仁を加えた、太陽傷寒の主方である麻黄湯（麻黄・桂枝・杏仁・甘草）の出番になります。